

平成29年2月23日

平成29年度 自動走行実証推進事業への応募申請書

市町村名	幸田町	
連絡先	部署名	企画部企業立地課立地推進グループ
	担当者役職・氏名	主事 太田 秀二
	電話番号	0564-63-5137 (直通)
	FAX番号	0564-63-5139
	メールアドレス	companylocation@town.kota.lg.jp

○ 本事業への応募理由

本事業への応募理由、狙い等について、自動走行システムへの期待やそれを活用することにより解決すべき行政課題を含めて記載してください。併せて、実証実験の成果を活用し、当該行政課題を解決するための自らの施策展開の方向性等も記載してください（今年度実施した地域におかれては、その点も踏まえて記載してください）。

テーマ：交通弱者の安心・安全な移動支援による外出機会の創出  
～自動走行技術を活かした町民の活力向上と地域活性化～

(1) 実証地域（ルート）において、自動走行システムを活用することにより、解決すべき行政課題（高齢者対策、交通不便地対策、観光振興対策等）が存在すること。

今回、提示する実証地域は、幸田町が地方創生交付金事業により自動走行の実証実験を進めている地域であり、町の拠点となる施設から、いかに交通弱者の移動手段をサポートするかが課題となっている。

本町においては、地域の足となるコミュニティバスを運行しているが、厳しい財政制約下のもと、交通弱者の多様な外出ニーズを満たすサービス水準を確保することは困難であることから、外出時間の選択やルート設定の自由度が高く、安心・安全に移動できる自動走行車の活用方策を模索している。

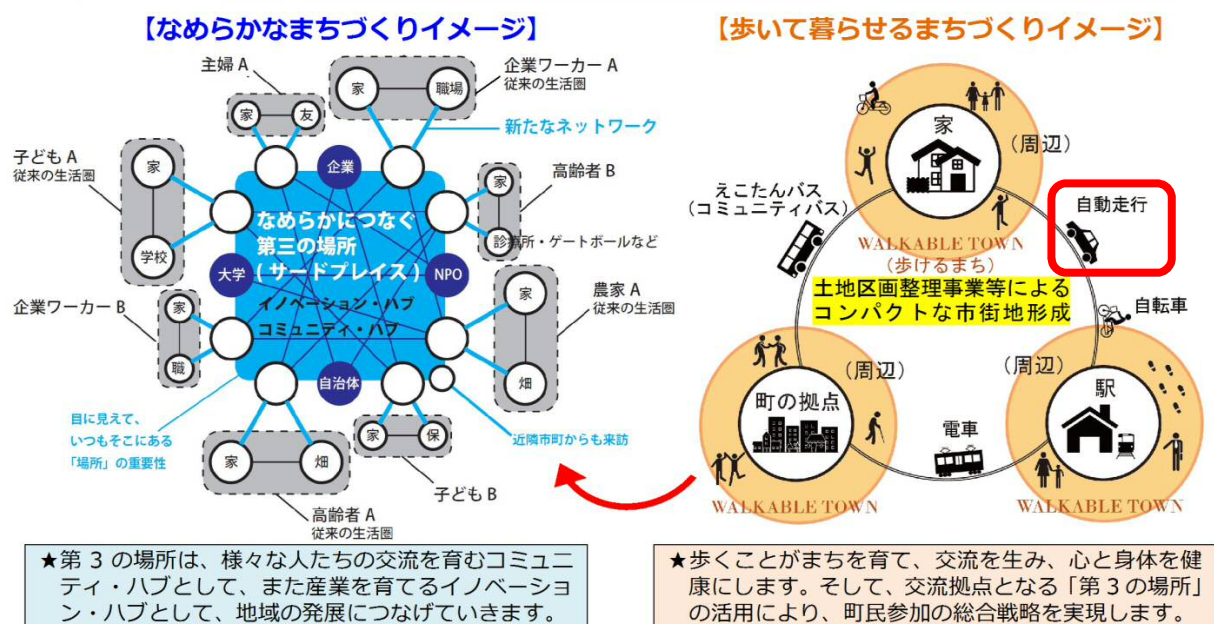
(2) 実証実験の成果を活用し、当該行政課題を解決するための自らの施策展開の方向性等が明確なこと（市町村のまちづくり計画等への位置付けや、市町村や地域の交通事業者等との関係者が連携し施策を具体化する体制の構築が見込まれることなど）。

平成 28 年度の愛知県の実証実験は、町の拠点であり交通結節点でもある「相見駅」と高齢化が進む「永野地区」を結ぶルートで、高齢者等の移動支援をテーマとした。

平成 29 年度の愛知県の実証実験では、町の拠点であり、あらゆる世代の人が集まる町民会館から、ひとつのモデルとして周辺集落へのルートを想定しているが、このルートは、現在、幸田町で進めている地方創生交付金事業により、今年度中に国土地理院認定の 3D マップの整備を行うため、よりレベルの高い自動走行の実証実験ができると考えている。

また、地方創生交付金事業により、本ルート周辺の農地において、ドローン等も活用した IT・IoT 農業の展開を検討していることから、自動走行技術を活用した産業振興や地域活性化など、地方創生に向けた幅広い取り組みを視野に入れている。

そして、JR 東海道本線に 3 つの駅を有する本町においては、3 つの駅と拠点施設や集落等を自動走行でネットワークさせることで、交通弱者の活動範囲が広がるとともに、様々な交流が促進されることで心と身体の健康が保たれ、町民が元気に活躍できる社会を築くものとしている。



様々な交流により心と身体の健康を保ち、高齢者も元気に活躍できる社会を築くことで社会保障費の抑制につなげます！

幸田町まち・ひと・しごと創生『総合戦略』より

(スペースは適宜広げて記載してください)

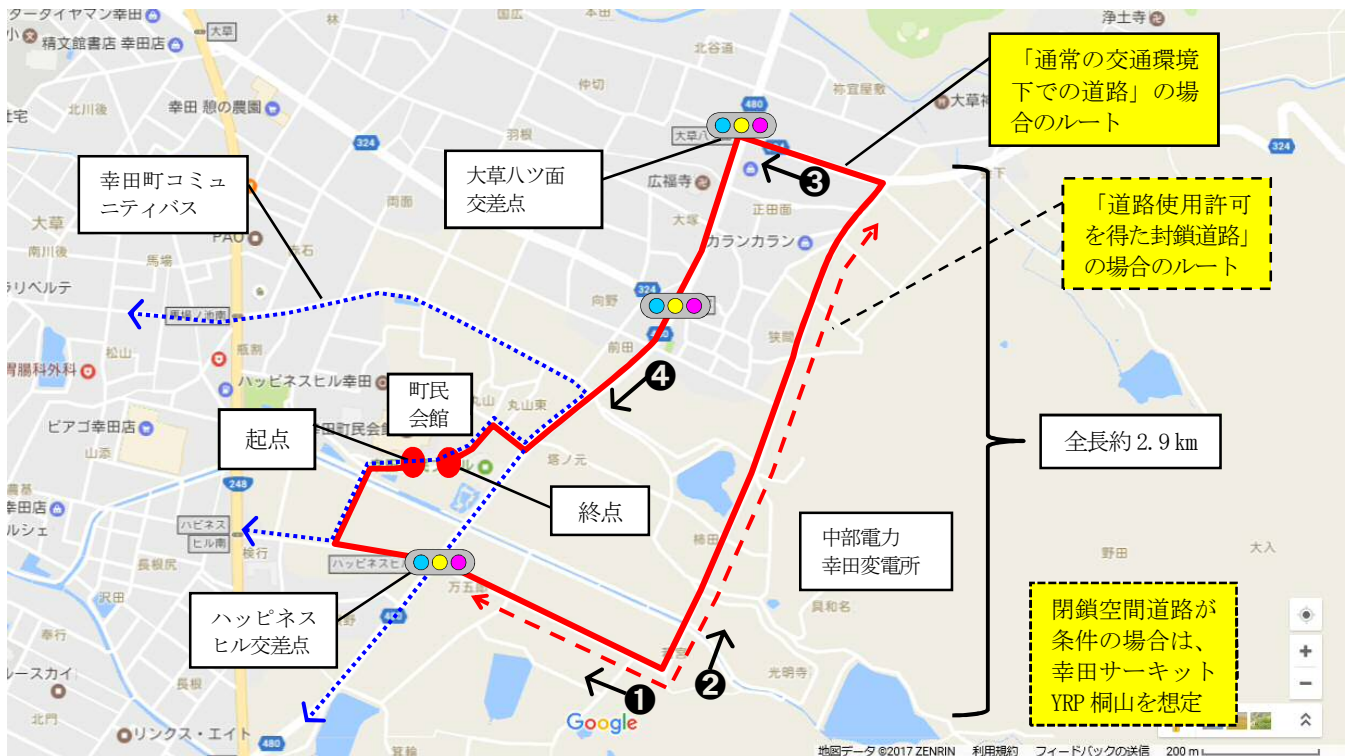
## ○ 実証実験実施場所、ルートの詳細

以下の点を記載及び地図に明示してください。路線内にある信号交差点、起点・終点場所、主要な施設（駅、病院、公共施設等）を示してください。

### 1 ルート（起点→終点）

幸田町町民会館→幸田町町民会館

### 2 ルート（地図）



### 3 地理条件（既存のバスルートの有無、運行本数や地域の状況等を記入）

#### (1) バスルートの有無と運行本数

- ・名鉄バス：平成26年9月30日（火）廃止
- ・幸田町コミュニティバス：1日6便、但し平日のみ（ルートは上図に記載）

#### (2) 地域の状況（平成28年住民意識調査「バスについて」）

- ・ルートが限られ、乗継ぎ所も少ない。
- ・町民・町内限定の無料タクシーとかのほうがありがたい。
- ・バスの本数を増やして欲しい。
- ・駅までのバスがほしい
- ・バス停を増やして欲しい。地区の中心に欲しい。

4 道路条件（募集要項も参照のこと）

項目名	内容
路線距離	片道約2.9km
車線数	片側1車線、白線一部劣化
道路構造	歩車分離（ガードレールない部分あり）、勾配あり
道路種別	県道美合幸田線、県道生平幸田線、 町道（大草1号線、塔ノ元2号線、会下光明寺1号線、 瓶割丸山1号線、検行3号線）
トンネル、踏切	ともに無し
交通量	全体的に少なく、普段渋滞は発生しない
交差点	右左折する四差路2か所、T字路5か所
起点・終点	起点：幸田町民会館 終点：幸田町民会館 駐停車場所、モニター調査実施場所の確保可能
その他特記事項	県道美合幸田線については、通勤時間帯は交通量が多め

5 写真（次のものを貼り付けてください。Google ストリートビューなどでも可。容量はワードファイル全体で5MB以下としてください。）

- (1) 道路の様子（主要地点数カ所）
- (2) 起点、終点場所（駅、公共施設等）
- (3) 車両待機場所（起点・終点場所と異なる場合）







6 高精度3Dマップの有無

④ (平成29年度整備予定の場合は、時期を明記してください。また、「有」の場合は、そのルートも記載してください。)

- ・平成29年度3月中に整備予定
- ・ルートは、P3 実証実験ルートを含むエリアの予定

無

7 貴自治体における自動走行に関連した独自の取組（実績、平成29年度の予定・予算措置状況等）

(1) 実績（平成28年度）

【自動走行実証推進事業の実施（愛知県）】

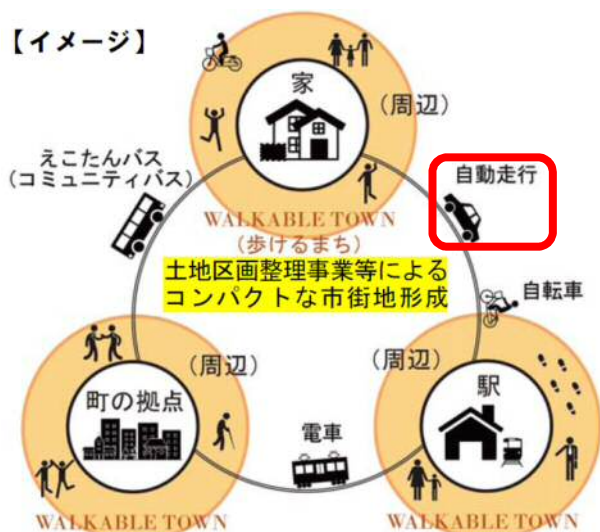
- ・行政課題：高齢者
- ・具体的内容：高齢者等交通弱者の移動支援
- ・走行ルート：JR相見駅～永野ちびっこ広場 2.6km
- ・実施日：平成28年6月23日（木）、24日（金）



【幸田町まち・ひと・しごと創生『総合戦略』（平成28年3月策定）】

- ・歩いて暮らせるまちづくり

総合戦略における様々な取り組みを実現するためには、高齢者を含めた町民が健康で外出しやすい環境を整えることが必要なため、本町では、それを実現する仕組みとして「歩いて暮らせるまちづくり」に取り組みます。▼ビジネスモデル展開



★土地区画整理事業等によりコンパクトな市街地を形成し、歩いて暮らせる利便性の高いまちづくりを推進します。

★家、駅、拠点それぞれの周辺を「ウォーカブルタウン（歩けるまち）」とし、これらの移動を公共交通や車の自動走行などで安全に支援します。

★歩くことを楽しくするシステムを開発し、町民の健康増進や交流機会の創出を図ります。（歩く道の健康レベル診断システム、歩く道と行き先のルート開発、3Dマップの活用、健康マイレージ<sup>※</sup>等）

(2) 平成 29 年度の予定・予算措置状況等

【自動走行技術深化事業（内閣府地方創生交付金事業）】

●事業期間

- ・平成 28～30 年度（地域再生計画：平成 28 年 12 月 13 日内閣総理大臣認定）

●事業概要

- ・高齢者を含む町民の外出機会を創出するため、移動支援として期待される自動走行の実用に向けた社会実験を一般公道で行い、住民周知（社会受容性浸透）を図るとともに、自動走行に必要な 3D マップについて、利便性が高く移動制約の少ないまちづくりへの活用方策を検討する。
- ・さらに、公道を中心とした 3D マップにドローン等を活用した高精度な農地地図の整備を合わせて行うことで自動走行や製造業の技術を有する民間事業者の参入を促し、IT・IoT 農業としての発展を図る。

●実施予定事業

ア 一般自動走行における住民周知（社会受容性浸透）事業：自動走行実証実験と社会受容性に関するアンケート調査の実施

○平成 28 年度

- ・自動走行路線の現地確認、アンケートの準備（アンケート票の作成等）、自動走行車両テスト走行

○平成 29・30 年度

- ・自動走行実施、アンケートの実施（事前・事後）と結果の取りまとめ

イ 高精度 3D 地図整備事業：国土地理院による公共測量申請

○平成 28 年度

- ・MMS による 3 次元計測

○平成 29 年度

- ・計測データの解析、自動走行用 3 次元地図作成

○平成 30 年度

- ・3 次元地図の公共測量申請

ウ 地図利活用による住民サービス向上検討事業：利活用方策検討

○平成 28～30 年度

- ・庁内検討会の開催



エ IT・IoT 農業への技術転用可能性検討調査：ドローンの活用、栽培支援における技術応用

○平成28年度

- ・ドローン飛行地域（農地）選定、ドローン飛行地域の現地確認・現地空撮、3次元データ解析

○平成29・30年度

- ・IT・IoT への利活用調査（文献等）、利活用検討内容の取りまとめ

8 その他参考資料（ある場合は添付）

●自動走行技術の活用・応用・発展の素地を備える『幸田町』

- ・（株）デンソー幸田製作所など自動車関連産業を中心に製造業が盛ん（平成26年の製造品出荷額等：県下7位）
- ・名古屋大学未来社会創造機構との連携及び協力
- ・愛知工科大学との連携及び協力
- ・愛知工科大学工学部情報メディア学科3年の石川竜矢さんが幸田町内にベンチャー企業「イーラトリップ」を設立

## 50年前の車窓 VRで楽しむ



幸田町に住む愛知工科大学3年の石川竜矢さん(21)が昨年12月、自動運転システムに関連するアプリなどを開発するベンチャー企業「イーラトリップ」を立ち上げた。同大学では初の「学生ベンチャー」だ。

石川さんは工学部で3Dコンテンツの制作など情報メディアを学ぶ。その知識を生かし、自動運転システムやカーナビと連動したアプリの開発、製造販売を自指す。

構想では、運転者も含めた自動運転の車に乗る人が、360度見回せる「ヘッドマウントディスプレイ」を装着。実際に走行する場所にあわせ、VR(仮想現実)を楽しんでもらう。例えば、走っている場所の50年前の様子を映し出して楽しむほか、観光スポットの案内が瞬時に表示されるという。

1年目の今年はず、町内の商店街を舞台に、現在の画像と過去の資料を集めてコンテンツ制作に取り組む。

名古屋大学などと協力して、自動走行の実証実験の場所を提供したり、町内の3Dマップを作成したりするなど、自動運転の技術開発に力を入れる町も協力。今後、最大50万円の補助金を出す予定だ。

16日に町役場で大須賀一誠町長(左)に起業を報告する石川竜矢さん(中央)＝16日、幸田町役場

大須賀一誠町長(左)に起業を報告する石川竜矢さん(中央)＝16日、幸田町役場

### 愛知工科大生で初 石川さん起業

### 自動運転と連動 アプリ開発へ

石川さんの「イーラトリップ」は、自動運転向けのフリーソフト「オートウェア」を開発した名古屋大学発のベンチャー企業「ティアフォー」の子会社だ。同社は2015年、名古屋大の准教授だった加藤真平さんの3D環境大准教授IIが立ち上げた。

現在、イーラトリップを含めた子会社9社が、3Dマップの作成など、自動運転に関連した機器やサービスを開発する。9社とも、石川さんと同じように名大などの学生が経営にあたる。「学生たちに大学の研究を実用化するという意識を持ってもらうことが大切」だといい、将来的には子会社を100社ほどまで増やすことを計画する。

加藤准教授は「自動運転の技術とは直接関係がないように見える「イーラトリップ」のサービスだが、自動運転に欠かせない3Dマップの見せ方の一つ。3Dマップに付加価値をつけるサービスとして期待している」と話す。(北上由樹)

### 自動運転関連 学生経営が増

ターゲット(フィックス)で再現したい。50年前にタイムスリップして、町内をドライブできれば楽しんでもらえると思う」と話した。